

『夜の寢覚』の係り結び

—係助詞の用法とその展開—

山口雄輔

『夜の寢覚』の係助詞「ぞ」「なん」「や」「か」「こそ」の分布調査を、日本古典文学大系（阪倉篤義校注）によって行った結果、次のようなことが判明した。^(註)和歌も含んだ全文において、出現率の高い順に並べると、「こそ」が最上位、「なん」が最下位にくるところから、「こそ—なん遠隔型」とでも呼べる順位を示す。又、上二位に注目して「こそ—ぞ上位型」と呼ぶこともできる。和歌を除く全散文の場合にも、順位に変化をきたさないもので、この命名で事足りるのである。ところが、全散文を言語場面によって地の文と話の文とに分けて調べると、様相が一変し、地の文は「ぞ—なん遠隔型」、話の文は「こそ—ぞ遠隔型」に転位する。地の文では多用される

「ぞ」が、話の文では最下位に落ち込んでいたのである。話の文を更に会話文と心話文とに分けて調べると、「なん」は常に会話文に多用されるが、「や」「か」「こそ」は巻によっては会話文より心話文に多く用いられることもある。三つの言語場面を比べると、係助詞の多い順に、会話文—心話文—地の文の順になる。和歌における係助詞の順位は、巻一を除き「や」が最上位に並ぶ。

係助詞の分布を、こうした順位だけに単純化して、共通する型を抽出できたが、それぞれの型と文章そのものの性質や表現内容との関連の仕方、および作品による違いなどは今後の研究課題である。本稿は、型の抽出だけで用例を掲げられなかった「分布とその型」の稿を補う目的で、各係助詞の具体的な用法、とりわけ文法的な用法を、実例に即して見て行く姉妹論文として書かれたものである。

なお作品による違いについては、『狭衣物語』のいわゆる大系本によつての調査は、発表済みであるので参照いただければ幸いである。

〔注1〕 本稿と同じ標題に、「係助詞の分布とその型」という副題を付

して、國學院大學國語研究会編「國語研究」第四九号・田邊正男博士喜寿記念号（昭和六十一年一月刊行予定）に発表する。

〔注2〕 拙稿『狭衣物語』の係り結び——係助詞の用法とその展開

——「文教大学国文」第一三号

二

大系本『夜の寢覚』の、和歌を除いた全散文の係り結びの用法による各係助詞の出現率は、次の表1のようになる。これから掲げる表は、すべて他の作品の場合も同じ形式を用い、ある程度まとまり次第、詳細な比較論を展開したいと考えている。

下の表1は横の一段一段が一〇〇%になっているので、横に見て行くと、前章でも述べたように、「こそ」が最も多く、三五%（小数点以下を四捨五入した）、続く「ぞ」は一〇%下回って二五%、「や」一八%と「か」一七%が僅差で中位、「なん」に至ってはぐっとさがつてわずか七%で最下位にあり、例の型としては最上位と

表1 夜の寢覚（和歌を除く）

百分率	合計	こそ		か		や		なん		ぞ		係り用法
		百分率	回数	百分率	回数	百分率	回数	百分率	回数	百分率	回数	
100%	169	41.4%	70	8.9%	15	13.0%	22	16.0%	27	20.7%	35	動詞
100%	56	41.1%	23	1.8%	1	1.8%	1	3.6%	2	51.8%	29	形容詞
100%	5	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	100%	5	形容動詞
100%	578	47.1%	272	14.9%	86	15.4%	89	5.2%	30	17.5%	101	助動詞
100%	288	19.8%	57	27.1%	78	29.5%	85	8.7%	25	14.9%	43	省略
100%	118	33.1%	39	8.5%	10	8.5%	10	8.5%	10	41.5%	49	消去
100%	4	50%	2	0%	0	0%	0	25%	1	25%	1	破格
100%	109	0%	0	16.5%	18	23.9%	26	0.9%	1	58.7%	64	断止法
100%	1327	34.9%	463	15.7%	208	17.6%	233	7.2%	96	24.6%	327	総数

最下位に注目した場合は「ぞーなん遠隔型」、上位二位に着目した場合は「ぞーこそ上位型」と呼べる順位を示すことはすでに述べたとおりである。

係り用法のうち、結びに動詞をとるものは「こそ」が四一%で最も多く、形容詞をとるものは「ぞ」が五二%で最高である。結びの形容動詞に対する係りのすべては「ぞ」である。助動詞では「こそ」が四七%で過半数を占める。省略用法は「や」と「か」に比較的多く、それぞれ三〇%および二七%である。消去用法の大半は四二%で「ぞ」が占める。破格はあまりなくて、「ぞ」「なん」に一つずつ、「こそ」に二例しか見られない。断止法は、「ぞ」が五九%で半数以上を占め、終助詞化の傾向をうかがわせる。「こそ」の断止法は零である。何かにつけて「ぞ」と「こそ」が対照的で、その違いが目立つ。

次の表2は縦に各用法の比率を示す。

係り結びの用法を、大きくI係り用法、II断止法と二つに分け、Iの係り用法を、表1・2のように、結びの語の品詞によってまず(1)動詞、(2)形容詞、(3)形容動詞、(4)助動詞と四つに分ける。この場合(1)動詞には補助動詞も含んでいることをお断りしておく。研究が詳細にわたるときは、この項だけでも更に細かい分け方が必要になるであろう。例えば助動詞を意味によって分類するなどのように

表2 夜の寢覚(和歌を除く)

百分率	総数	こそ	か	や	なん	ぞ	係り用法		
							動詞	形容詞	形容動詞
12.7%	169	70	15	22	27	35	動詞		
4.2%	56	23	1	1	2	29	形容詞		
0.4%	5	0	0	0	0	5	形容動詞		
43.6%	578	272	86	89	30	101	助動詞		
21.7%	288	57	78	85	25	43	省略		
8.9%	118	39	10	10	10	49	消去		
0.3%	4	2	0	0	1	1	破格		
8.2%	109	0	18	26	1	64	断止法		
100%	1327	463	208	233	96	327	合計		

……。結びの省略用法を(5)、消去用法を(6)とする。破格用法はきわめて少ないが、異本などによってはどうなるかわからないので、この項も(7)として設けておく。

表2を見て全体的に言えることは、結びの語に助動詞がくることが四四%で圧倒的に多く、これに動詞の一三%を加えると全体の半数以上を占め、これが係り結び用法の標準であることがわかる。同じ用言でありながら、形容詞、形容動詞はあまりこない。結びの省略用法が二二%で、消去用法の九%をはるかに上回っている。断止

法の八%は意外に少ない感じがする。破格の僅少なことも注目すべき点であろう。

三

それではこれから、係り結びの用法の展開を、实例に即して見て行くことにする。代表的な用例を最小限一例ずつは掲げて行く。

表3-1(1) 夜の寢覚(和歌を除く)

百分率	総数	巻五	巻四	巻三	巻二	巻一	ぞ		係り用法
							動詞	形容詞	
10.7%	35	6	5	8	8	8	動	詞	
8.9%	29	5	4	4	9	7	形	容	詞
1.5%	5	0	2	0	1	2	形	容	動
30.9%	101	31	21	19	12	18	助	動	詞
13.1%	43	17	5	10	8	3	省	略	
15.0%	49	17	13	11	3	5	消	去	
0.3%	1	1	0	0	0	0	破	格	
19.6%	64	9	12	13	9	21	断	止	法
100%	327	86	62	65	50	64	合	計	

用例の下に[㊦]は地の文、[㊧]は会話文、[㊨]は心語文、[㊩]は和歌などのように言語場面を示し、更に巻数、頁数、行数を()に入れて示した。

I 「ぞ」の係り用法

(1) 「ぞ」の結びが動詞

○まろも夢とぞおぼゆる。㊦(一〇五八⑤)

(2) 「ぞ」の結びが形容詞

○いま思ふぞあやしき。㊦(三〇二二八⑪)

(3) 「ぞ」の結びが形容動詞

○と思ふぞ、いとひとりならずあはれなる。㊦(一〇五九⑬)

(4) 「ぞ」の結びが助動詞

○とぞ書き給ひたる。㊦(四〇二八六⑯)

(5) 「ぞ」の結びの省略用法

① 〈言ふ〉系の語の省略

○さらなる事は、のちにさはとぞ。㊦(四〇二八六⑰)

② 〈在り〉系の語の省略

○「いとおほかるは、なにの文の御前近きぞ」と、面がくしに、こ

れを取りて見給ふに、㊦(五〇三七五⑳)

③ 〈為〉系の語の省略

○いましてし心みてぞ。㊦(五〇三五四㉑)

(6) 「ぞ」の結びの消去用法

○広沢の御ことばかりぞ、見奉らまほしく、おぼつかなげに思したれば、圃(二一―一四三①)

(7)「ぞ」の結びの破格

○宮たちは、ただ、かうぞともなく、あてにおはしますべきぞかし。

圃(五―三七八④)

II 「ぞ」の断止法

○あやしく、例ならずなが居し給ふとは見つるぞ。圃(三―二三八②)

表3―(2)夜の寢覚(和歌を除く)

百分率	総数	卷五	卷四	卷三	卷二	卷一	なん		係り用法
							動詞	形容詞	
28.1%	27	4	6	3	9	5	動詞	形容詞	係り用法
2.1%	2	1	0	0	0	1	形容詞	形容動詞	係り用法
0%	0	0	0	0	0	0	形容動詞	助動詞	係り用法
31.3%	30	5	7	4	7	7	助動詞	省略	係り用法
26.0%	25	6	8	1	5	5	省略	去格	係り用法
10.4%	10	1	2	2	4	1	去格	破格	係り用法
1.0%	1	0	0	0	1	0	破格	断止	法
1.0%	1	0	0	0	1	0	断止	合	計
100%	96	17	23	10	27	19	合	計	

I 「なん」の係り用法

「なん」は、ときに「なむ」とも表記されることがある。用例ではそのまま示す。

(1)「なん」の結びが動詞

○となむ言ふなり。圃(二―一七八⑨)

(2)「なん」の結びが形容詞

○ただわが身からとなん、はずかしき。圃(五―三三八⑬)

(3)「なん」の結びが形容動詞

この用法は「なん」には見当たらない。

(4)「なん」の結びが助動詞

○源氏に成り給へりしになむありける。圃(一―四五④)

(5)「なん」の結びの省略用法

①〈言ふ〉系の語の省略

○かくなん。圃(四―二九九⑭)

②〈在り〉系の語の省略

○けふはいとくるしげになむ。圃(一―一〇三⑥)

③〈為〉系の語の省略

○いまよりは、うとからず思ひきこゆるあまりになん、伊勢をの海士も、あまりよりははかばかしくなく。圃(三―一九九⑪)

(6)「なん」の結びの消去用法

○暮になんまで侍りぬるを、圃(三―二三三⑮)

(7) 「なん」の結びの破格

○となむ言ふなり。圃(二一七七八⑨)

II 「なん」の断止法

○さても少将、からくなむ。圃(二一七二⑭)

右の例は省略用法②とも取れるが断止法とした。

表3—(3)夜の寢覚(和歌を除く)

百分率	総数	卷五	卷四	卷三	卷二	卷一	や		係り用法
							動詞	形容詞	
9.4%	22	6	2	2	10	2	動詞	形容詞	係り用法
0.4%	1	1	0	0	0	0	形容詞	形容動詞	
0%	0	0	0	0	0	0	助動詞	助動詞	断止法
38.2%	89	10	19	15	15	30	省略	省略	
36.5%	85	24	17	15	11	18	消去	消去	断止法
4.3%	10	2	8	0	0	0	破格	破格	
0%	0	0	0	0	0	0	断止	断止	合計
11.2%	26	6	6	2	5	7	合計	合計	
100%	233	49	52	34	41	57			

I 「や」の係り用法

(1) 「や」の結びが動詞

○逢ふには身をかふるたぐひ、なくやある。圃(二一六九⑮)

(2) 「や」の結びが形容詞

○人やはずらき。圃(五一三七五⑦)

(3) 「や」の結びが形容動詞

この用法は「や」には見当らない。

(4) 「や」の結びが助動詞

○また、この言ひののしることをや、聞き給へらん。圃(四一二九八⑯)

八⑯

(5) 「や」の結びの省略用法

① 〈言ふ〉系の語の省略

○なをかくてそむき給ひなんとや。圃(五一三七一④)

② 〈在り〉系の語の省略

○又そこの御祈りのしるしにや、六月朔日ころよりは、圃(四一三二⑮)

三一八⑮

③ 〈為〉系の語の省略

○げに聞しめすもことはりなれど、又さのみやは。圃(五一三七六⑭)

⑭

(6) 「や」の結びの消去用法

○け高きかたや、たゞすこし後れたる心地すると見るを、圃(五一三五①)

三五①

II 「や」の断止法

○さのみ夢のやうに、ものはかなき契あらんやは。 ㊦(五〇三五五)

⑮
なお「や」には破格は見当らなかつた。

表3—(4)夜の寢覚(和歌を除く)

百分率	総数	卷五	卷四	卷三	卷二	卷一	か		係り用法
							動詞	形容詞	
7.2%	15	3	3	2	3	4	動詞	形容詞	係り用法
0.5%	1	0	0	0	1	0	形容詞	形容動詞	
41.3%	86	17	18	13	26	12	助動詞	省略	係り用法
37.5%	78	26	20	16	6	10	省略	略	
4.8%	10	1	1	1	7	0	消去	略	係り用法
0%	0	0	0	0	0	0	破格	略	
8.7%	18	1	7	1	6	3	断止	法	係り用法
100%	208	48	49	33	49	29	合計	計	

I 「か」の係り用法

(1) 「か」の結びが動詞

○いかばかりかは心憂く見奉る。 ㊦(一〇九六①)

右のように補助動詞も表では動詞に分類した。

(2) 「か」の結びが形容詞

○いで、なにかめでたき。 ㊦(二〇一五九⑤)

(3) 「か」の結びが形容動詞

この用法は「か」には見当らない。

(4) 「か」の結びが助動詞

○何とかは申され給はん。 ㊦(四〇二九二⑬)

(5) 「か」の結びの省略用法

① 〈言ふ〉系の語の省略

○なに事をか。 ㊦(五〇三九七⑤)

② 〈在り〉系の語の省略

○年の数そひ給ふけじめにや。 ㊦(二〇一八四⑯)

③ 〈為〉系の語の省略

○たのもし人には、たれをか。 ㊦(四〇二五九③)

なお、いわゆる連語「とかや」は〈言ふ〉系の語の省略された①の用法が多いが、結びを伴う場合もあるので、まとめて他日稿を改めて詳しく論じることにはしたい。

(6) 「か」の結びの消去用法

○その侍らん人々は、さていかでかもてかくし給ふかた侍らしを、

㊦(二〇一三六④)

II 「か」の断止法

○左衛門督のさる事いひしはまことか。
「か」には破格は見当らなかつた。
詠(二一―一五六⑧)

表3―(5)夜の寢覚(和歌を除く)

百分率	総数	卷五	卷四	卷三	卷二	卷一	こそ		係り用法
							動詞	形容詞	
15.1%	70	17	8	11	16	18	動詞	形容詞	断止法
5.0%	23	5	6	3	5	4	形容詞	形容動詞	
0%	0	0	0	0	0	0	助動詞	助動詞	略
58.7%	272	57	41	48	57	69	助動詞	助動詞	
12.3%	57	7	21	11	5	13	省略	省略	去格
8.4%	39	14	12	4	6	3	省略	省略	
0.4%	2	0	0	0	2	0	破格	破格	止法
0%	0	0	0	0	0	0	断止	断止	
100%	463	100	88	77	91	107	合計	合計	

I 「こそ」の係り用法

(1) 「こそ」の結びが動詞

○人の御世、さだめなければ、とみに、えたちかへらずもこそ侍れ。

詠(四―三一〇⑦)

(2) 「こそ」の結びが形容詞

○つねにうとうとしき気色にこそ心憂けれ。詠(一―八三①)

(3) 「こそ」の結びが形容動詞

結びが形容動詞になる例は、この「こそ」にも遂に見当らず、結局、「ぞ」にだけしかなかつたことになる。

(4) 「こそ」の結びが助動詞

○よそながらも思ひやりきこえつこそは、後見きこえめ。詠(五―三二七②)

(5) 「こそ」の結びの省略用法

① <言ふ> 系の語の省略

○おぼえ侍らぬを、うけたまはりてこそは」と答ふれば、詠(三―一三六①)

② <在り> 系の語の省略

○うちこそ、これよりさきの契と、あさからず見ゆれば、詠(二―一六五⑤)

③ <為> 系の語の省略

○かへり給はんを見てこそ」とて、詠(三―二二六③)

(6) 「こそ」の結びの消去用法

数が比較的多いので二種に分類して、代表例を示す。

① 接続助詞による結びの流れ

○月日の光をならべたるやうにこそあらましかど、いかゞはせん。

詠(五)三九三⑬)

②体言による結びの流れ

○御位・世のおぼえこそあまりことくしうなりさだまり給ひにたる御年齢・身の有さまは、四(四)二六六④)

(7)「こそ」の結びの破格

○いもが家路ならねど、わけ参り給へるこそ浅からず 詠(二)一七五⑭)

七五⑭)

○心こそ女よ。詠(二)一五九⑦)

この例は結びが名詞ともとれる用法である。

右の二例が「こそ」の結びの破格のすべてである。「こそ」には

断止法は見当らない。

四

ここで、和歌における係り結びの検討に入る。「なん」は和歌には全く用いられない。地の文では「ぞ」、話の文では「こそ」が最上位であったが、和歌では「や」「か」がその位置に躍り上がり、「ぞ」は比較的近い数でそれに次ぎ、「こそ」「か」は極めて少ない。

表4は、散文の場合にならって、係り結びの用法を、I係り用法、II断止法に大別し、I係り用法を更に結びの語の品詞別に、(1)動詞、(2)形容詞、(3)形容動詞、(4)助動詞に分け、それから更に、結びが省

表4 夜の寢覚(和歌)

百分率	総数	こそ	か	や	ぞ	係り用法	
						動詞	形容動詞
10.5%	4	1	0	1	2	動詞	
10.5%	4	0	0	0	4	形容動詞	
0%	0	0	0	0	0	形容動詞	
48.4%	18	2	1	12	3	助動詞	
0%	0	0	0	0	0	省略	
7.9%	3	0	0	2	1	消去	
0%	0	0	0	0	0	破格	
23.7%	9	0	1	4	4	断止法	
100%	38	3	2	19	14	合計	

略されているか、消去しているか(いわゆる「結びの流れ」)によって、(5)結びの省略用法、(6)結びの消去用法とに分け、これらに当てはまらない異例を(7)破格として扱ったものを一覽表にしたものがある。

助動詞の四八%と動詞の一一%ですでに全体の過半数を占めることは散文と同様であるが、散文では二二%もあった省略用法が和歌では零、散文では八%しかなかった断止法が、和歌では二四%もあることが目立つ特色と言えるであろう。結びの消去用法は、散文と和歌とでは九%と八%で大差はない。結びが流れるということは構

文をそれだけ複雑にすることになるわけであるが、和歌も散文も『寝覚』の場合に数があまり多くないということは、文の構造が比較的単純なのであろうか。

今表2と表4とを比べて述べたので、表1に相当する和歌の場合の表を次に掲げておく。

下の表5は、第一章の表1と同様に、横に比率を見ることによつて、各係助詞の、各用法における出現率を知ることができる。和歌の中では「なん」は用いられないことはすでに述べた。総数の段を横に見て行くと、「や」が五〇%で最も多く、全体の過半数を占めるのに対して、同じ疑問・反語の係助詞でありながら「か」は僅か六%で最低である。「ぞ」が三七%で「や」に次ぐが、同じ確定の係助詞「こそ」の方は僅か八%である。和歌にあつては「や」の抜きん出た優勢という事実は、どうもこの物語だけの特徴ではないようである。その「や」と「ぞ」に断止法が多いので、一例ずつ用例を引いておく。

○立ちも居もはねをならべしむら鳥のかゝる別を思ひかけきや 𩇑

(二一六八⑤)

○あま衣たちわかれなむとおもふにもなに人わろくおつる涙ぞ 𩇑

(二一六二⑮)

ついでに、「か」は和歌には二例しかないうち、一例がこの断止

表(5) 夜の寝覚(和歌)

百分率	合計	こそ		か		や		ぞ		動詞	形容詞	形動詞	助動詞	省略	消去	破格	断止法	総数
100%	4	25%	1	0%	0	25%	1	50%	2									
100%	4	0%	0	0%	0	0%	0	100%	4									
100%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0									
100%	18	11.1%	2	5.6%	1	66.7%	12	16.7%	3									
100%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0									
100%	3	0%	0	0%	0	66.7%	2	33.3%	1									
100%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0									
100%	9	0%	0	11.5%	1	44.4%	4	44.4%	4									
100%	38	7.9%	3	5.3%	2	50%	19	36.8%	14									

法とみなされるので、ここで先にその例を掲げておく。

○かさねじと思ひたつともあま衣この世とのみも君をたのむか 歌

(二一六三④)

次に、「ぞ」「や」「か」「こそ」の順で、それぞれの係動詞の用法を、例を挙げつつ詳しく検討して行く。

表6 (1)夜の寢覚(和歌)

百分率	総数	巻五	巻四	巻三	巻二	巻一	ぞ		係り用法
							動詞	形容詞	
14.3%	2	1	0	0	1	0	動詞	形容詞	計
28.6%	4	0	0	1	1	2	形容詞	形容動詞	
0%	0	0	0	0	0	0	助動詞	省略	
21.4%	3	1	1	0	0	1	省略	去格	
0%	0	0	0	0	0	0	消格	止格	
7.1%	1	0	0	0	0	1	破格	法	
28.6%	4	0	1	0	2	1	断	止	
100%	14	2	2	1	4	5	合	計	

まず、「ぞ」の用法であるが、巻一、巻二の出現数(巻一が五例、巻二が四例)に比べて、それ以下の巻々が非常に少なくなっている。

点が気になる。各用法の用例を一例ずつ掲げる。

I 「ぞ」の係り用法

(1) 「ぞ」の結びが動詞

○墨染にはれぬ雲居も朝日山さやけ影に光をぞ知る 歌(五三九六③)

九六③)

(2) 「ぞ」の結びが形容詞

○雲居にはおよばざりける身をすればしほすむに影ぞまばゆき 歌(三二二七①)

歌(三二二七①)

(3) 「ぞ」の結びが形容動詞

「ぞ」にはこの用法は見当らない。

(4) 「ぞ」の結びが助動詞

○立ちよれば岩うつ波のをのれのみくだけでもぞかなしかりける 歌(一一九三④)

歌(一一九三④)

(5) 「ぞ」の結びの省略

「ぞ」にはこの用法は見当らない。

(6) 「ぞ」の結びの消去

○雲居にはすむ空ぞなき月なれば谷にかくれしかげぞ恋しき 歌(一一八一⑩)

(一八一⑩)

(7) 「ぞ」の破格

「ぞ」には破格の用法は見当らない。

II 「ぞ」の断止法

すでに表5の後の説明のときに用例を掲載済みである。

次に最も優勢の「や」について述べるが、「や」の場合、結びに助動詞をとる用法が六五%もあるので、種々の助動詞の例を挙げておく。

表6—(2)夜の寢覚(和歌)

百分率	総数	巻五	巻四	巻三	巻二	巻一	や		係り用法
							動詞	形容詞	
5.3%	1	0	1	0	0	0	動詞	形容詞	係り用法
0%	0	0	0	0	0	0	形容詞	形容動詞	
63.2%	12	2	3	1	3	3	助動詞	省略	係り用法
0%	0	0	0	0	0	0	省略	消去	
10.5%	2	0	0	1	1	0	消去	破格	断止法
0%	0	0	0	0	0	0	破格	断止	
21.1%	4	1	2	0	1	0	断止	法	計
100%	19	3	6	2	5	3	合計		

I 「や」の係り用法

(1) 「や」の結びが動詞

○魂のあくがるばかりむかしより憂けれど物を思ひやはする 〔四〕三二一⑥

(2) 「や」の結びが形容詞

「や」にはこの用法は見当らない。

(3) 「や」の結びが形容動詞

「や」にはこの用法は見当らない。

(4) 「や」の結びが助動詞

○こよひだにかけはなれたる月を見てなをやたのまん巡りあふよを 〔二〕一八〇⑫

〔二〕一八〇⑫

○こぎかへりおなじ湊による船のなぎさはそれと知らずやありつる 〔一〕一八四⑥

〔一〕一八四⑥

○我ごとや花のあたりに鶯の声もなみだものびわびぬる 〔一〕一〇八⑨

〔一〕一〇八⑨

(5) 「や」の結びの省略

「や」にはこの用法は見当らない。

(6) 「や」の結びの消去

○めぐりあはむ折をもまたずかぎりと思ひはつべき冬の夜の月 〔二〕一八〇⑥

〔二〕一八〇⑥

(7) 「や」の破格

「や」の用法には破格は見当らない。

II 「や」の断止法

すでに引用済みである。

次に出現率の最も低い「か」についてであるが、二例しかないものであって、断止法の一例はすでに引用済みなので助動詞のくる例だけを、表6―(3)のあとに掲げるだけしておく。

表6―(3)夜の寢覚(和歌)

百分率	総数	巻五	巻四	巻三	巻二	巻一	か	
							動詞	形容詞
0%	0	0	0	0	0	0	形容詞	係り用法
0%	0	0	0	0	0	0	形容動詞	
50%	1	0	1	0	0	0	助動詞	
0%	0	0	0	0	0	0	省略	
0%	0	0	0	0	0	0	消去	
0%	0	0	0	0	0	0	破格	
50%	1	0	0	0	1	0	断止法	計
100%	2	0	1	0	1	0	合計	

「か」の結びが助動詞の例

○かりのまのしばしほどと思ふだにかばかりかは袖のぬれける

Ⅲ 「こそ」の断止法

次に「こそ」の場合に移るが、「こそ」も「か」と同様、用例数が極めて少なく、僅かに三例である。後の他の作品との比較するときの都合上、形通り表を作成し、用例を掲げておく。

表6―(4)夜の寢覚(和歌)

百分率	総数	巻五	巻四	巻三	巻二	巻一	こそ	
							動詞	形容詞
33.3%	1	0	1	0	0	0	動詞	係り用法
0%	0	0	0	0	0	0	形容詞	
0%	0	0	0	0	0	0	形容動詞	
66.7%	2	1	0	0	1	0	助動詞	
0%	0	0	0	0	0	0	省略	
0%	0	0	0	0	0	0	消去	
0%	0	0	0	0	0	0	破格	計
0%	0	0	0	0	0	0	断止法	
100%	3	1	1	0	1	0	合計	

「こそ」の結びが動詞

○いにしへもかくやは物を思ひけんえもいひしらぬ心地こそすれ

Ⅳ (四)二七三③

「こそ」の結びが助動詞

○ありしにもあらずうき世にすむ月の影こそ見しにかはらざりけれ

歌(二一七三⑩)

○問ふにこそかたかひごめの巢籠りもいぶせからずは思ひなりぬれ

歌(五三八九⑧)

以上の三例で「こそ」の用例は尽きる。和歌においては、「か」と「こそ」の用法が、かなり限定されていることがわかる。こうした傾向は、何も特にこの物語に限った特色ではないようで、『狭衣物語』を調べた際にも、こうした事実が認められたのであった。

最後に、『夜の寢覚』のすべての和歌の数と、和歌に用いられているすべての係り結びが、各巻ごとにどのような比率で現れているかをみておくことにする。

表7 夜の寢覚(和歌)

	① 歌の数	② 係り結びの数	②の①に対する百分率
巻一	17	8	47.1%
巻二	13	11	84.6%
巻三	11	3	27.3%
巻四	18	10	55.6%
巻五	13	6	46.2%
総数	72	38	52.8%

表7が示すように、『夜の寢覚』の総歌数七十二首に対して、係り

結びの総数は三八例であり、係り結びの総歌に対する割合は、五二・八%である。和歌の係り結びについては、すでに小久保宗明氏が、『語文』第八輯(昭和三十五年五月)に、「係結の用法からみた古今和歌集と新古今和歌集の相違について」という御論考をまとめておられ、それによれば、『古今集』の場合は四九・一%、『新古今集』の場合は三八・二%である。従って、『夜の寢覚』の五二・八%という値は、『古今集』に近い数値であることが確かめられたわけである。ただ『夜の寢覚』の場合は、和歌の数が比較的少ないせいから、巻によって大きな片寄りがあり、例えば巻二では八四・六%もあるかと思うと、巻三では二七・三%という極めて低い値になっている。これが、同じ平安朝後期の物語でも、『狭衣物語』のように和歌の非常に多い作品(『夜の寢覚』の約三倍)になると、数も安定するのか、各巻ごとにあまり大きな開きはしない。異本による違いがあるが、いわゆる大系本『狭衣物語』では、総歌数二四首に対して係り結びの総数は九七例で、その割合は四五・三%であり、最も高いものでも巻一の五三・八%どまりで、最も低い巻は、巻四の四〇・五%である。目下、『浜松中納言物語』について調査中であるが、平安朝後期物語におけるこうした数値は、『古今集』に近い五〇%前後に落着くのではないだろうか。

結び

ここまで検討してきたことから、『夜の寢覚』の係り結びの特色ともいべきものを列挙しておく。ほぼ同じ時期に発表することのできた姉妹論文の方は、主として分布調査を軸とした研究で、各係助詞の各巻における、あるいは種々の言語場面における分布状態や数の順位の類型について述べているので、本稿ではなるべくそのよくな記述は避けて、係り結びの用法の特徴をのしぼって要約しておくことにする。自明のことではあるが、いずれも、大系本『夜の寢覚』においては、という前提句を省いてある。なおパーセントの数は、表の数値を小数以下を四捨五入して使った。

- 1、和歌を除いた全散文において、最も出現率の高いのは「ぞ」ではなくて、「こそ」の三五%である。
 - 2、「ぞ」は二位で、二五%であり、「こそ」には全然見られない
- 断止法の用例が多く、全断止法の五九%も占める。
- 3、「や」「か」の一八%と「か」の一七%が僅差で中位を保つ。「や」も「か」も結びの省略用法が、結びに助動詞をとる用法に次いで多用されている。
 - 4、通常の係り用法では、どの係助詞も、結びに助動詞をとる用法の出現率が最も高い。
 - 5、結びに動詞をとる用法も少なくないが、同じ用言でも形容

詞・形容動詞はこの物語の係り結びでは嫌われている。とりわけ形容動詞は「ぞ」以外の係助詞の結びに全く使用されていない。

- 6、連語「やらん」が、数こそ少ないが散見する。
 - 7、連語「ぞかし」（断止法として扱った）と、連語「とかや」が目につく。特に「とかや」は文末にくる断止法と見なせる用法が多いが、結びをとる場合もあるので、別稿で詳しく再検討したい。
 - 8、和歌には「なん」は全く用いられない。確定の係助詞「ぞ」「こそ」の合計（四五%）よりも、疑問の反語の係助詞「や」「か」の合計（五五%）の方が上回るが、その中でも「や」が圧倒的に優勢である。（「や」だけで五〇%）
 - 9、結びの語は、助動詞が非常に多く、動詞とあわせて過半数を占め、形容詞や形容動詞があまり見られないことは、散文の場合と共通の特徴である。
 - 10、散文の場合に比して、省略用法や消去用法が少ない。
 - 11、和歌における係り結びの総歌数に対する比率は五三%^(注3)であり、『新古今集』よりも『古今集』の値に近い。
 - 12、散文、和歌を通じ破格はきわめてわずかである。
- [注3] 第一章の[注2]に掲げた拙稿の結論の部分で、『夜の寢覚』に触れ、この値を四八%としたのは、同一和歌の中で重複する係り

結びなどに見落しがあったためで、今回の数で正確を期したつもりです。本紙面をお借りしてお詫びいたします。